

最優秀賞

「当たり前」の大切さ

群馬県 太田市立沢野小学校五年 富岡 慈織

また夏が来る。八月十二日がやってくる。テレビで日航機つい落事故のニュースが流れる度、ぼくの心はザワザワと複雑に動き出す。

ぼくのうちは、両親と兄、そしてぼくの四人家族だ。家族同然の大切な飼い猫も一匹いる。ぼくは学校で勉強し、友達と遊ぶ。学校以外ではサッカーや陸上をがんばっている。これがぼくの日常で、ぼくの「当たり前」だ。

毎年流れる日航機事故のニュースを、母が悲しそうに見ていることに気付いたのは、もう数年も前になる。辛そうな母の表情が気になって、ある年ぼくはなぜなのか聞いてみた。母から返ってきた答えに、ぼくはただただおどろいて何も言うことができなかつた。

一九八五年八月十二日。午後六時羽田発、大阪行きの日航機一二三便。り陸から四十四分後、群馬の

山中にっい落。なんとこの飛行機に、母は乗るはずだったという。三十三年前の夏、母と母の兄、そして母の母、つまりぼくの祖母の三人で、大阪の親せきの家へ遊びに行くことになったそうだ。その時、祖母が買おうとしたのが、あの日航機のチケットだ。けれど、お金を払おうとした時、必要な書類を家に忘れてきたことに気付いた。すぐ家に戻り、再度先程のチケットを買いに行こうとした時、突然雨がふってきた。祖母は原付バイクに乗っていたので、その日は行くのをあきらめた。数日後、同じチケットを買いに行くと、その店であつかつている分は完売していたそうだ。仕方なく祖母は、同日同時こく発の全日空機のチケットを買ったという。

ぼくは鳥肌が立った。もし母があの日飛行機に乗っていたら、ぼくは母に会えなかつた。それどころか、ぼくは生まれてこなかつたのだ。家族や友達とも会

えなかったし、今、目の前にある全てを、知る事も見る事も無かったのだ。真っ暗な世界に突き落とされたようで、考えれば考える程こわくなる。もしかしたら、ぼくの存在自体が「無」だったのだ。

同時に、不思議な気持ちになった。いくつもの「もしも」が頭をよぎる。もしあの時、祖母が忘れ物をしなかったら、雨が降らなかったら、祖母がバイクでなく車に乗っていたら、チケットが売り切れていなかったら。まるで運命の別れ道のようにたくさんぐう然が重なり合い、今の当たり前の生活があるのだ。

その当たり前がずっと当たり前に続くかどうかは分からない。ちょっとしたぐう然によって、かん単にうばわれてしまうかもしれない。きっと母も、命をつなぐことが出来なかった人をもって、毎年悲しんでいるのだろう。そう気付いた時、ぼくは当たり前前の日常に感謝しながら、一日一日を、一秒一秒を、無駄にはいけないと思った。今が頑張っているサッカーや陸上もそうだし、学校の勉強、家族や友人と過ごす当たり前の時間も大切にしていかなくてはならない。意味のない、無駄な時間なんてないのだから。

ぼくは今年の八月十二日も、悲しみの時こくに母と共に手を合わせる。

